

黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』
——班別輪読のための導入講義——

開発電子技術(株)取締役
国民文化研究会常務理事

長 内 俊 平

一、初めに

1. 聖徳太子について 片岡山のみ歌を中心に(一五八頁・二一六頁)
2. 黒上正一郎先生と本書について
本会の前身である一高昭信会の生ひ立ちと本書との関係について。(『昭和史に刻むわれらが道統』と、序文(二三六頁)を中心に)

二、聖徳太子の信仰思想を貫道するもの

1. 共に是れ凡夫のみ(憲法第十条 二二六頁)(二二一頁・五五頁・六二頁・六九頁・七二頁・一〇三頁 他)
2. 自他の二境を等しうす
「自行外化を憶して以て心を調伏すと雖も、若し自他の二境を存して修業せば、即ち修する所廣からずして、物とその苦樂を同じうすること能はず、所以に勤めて応に著を離るべしと明かすなり。」(六八頁)
(維摩經義疏文殊問疾品)
「此の愛見の悲は善なりと雖も、猶是れ相を存し、自他の二境を平等にして廣く衆生を化すること能はず」
(六八頁)(維摩經義疏文殊問疾品)

「自他の二境を等しうして、群生とその苦樂を共にす」(八六頁・九七頁)(維摩經義疏文殊問疾品)
「我が子の稱は自他を別たす、唯善に在り。」(一〇六頁)(勝鬘經義疏序説)

以上に関連して、憲法第一条、第二条、第九条、第十条、第十四条、第十五条、第十七条 並びにソクラテス・キリスト・親鸞の言葉さらうたと消息から、岡潔先生、桑原暁一さんのお言葉などを引用

三、輪読について (一九一頁から百五頁迄)

1. 輪読とは
2. 本の読み方について
「文に随ひて直ちに唱ふるのみ」(一八四頁)(法華義疏・分別功德品)
訓話の果す役割について (九頁・一七二頁)
声をきくべきこと。「声は以て意を伝へ、書は以て声を伝ふ」(一八二頁)(勝鬘經義疏序説)
かなしきことばをくりかへし分るところから何処からでも読むこと。(かたと消息 八六頁)
志をうけつぐべきこと。(九頁)

以上